

「日本政策学生会議」で最優秀賞を受賞 総合政策学部・横山ゼミ3グループ“4賞総なめ”の快挙

慶応大学三田キャンパスで昨年12月開催された「第10回日本政策学生会議 (ISFJ)」(3、4日)で、総合政策学部横山研究会(ゼミ)の竹中恵実さん(政策科学科4年)、鳥居長英さん(同)らのグループが発表した論文が最優秀賞を受賞した。「企業における企業による経済性と社会性の両立」と題し、容器包装リサイクル法施行に伴う実態と課題をうきぼりにした力作だ。また横山ゼミの他の2つのグループも優秀賞、優秀プレゼン賞、優良賞に輝き、大会の4賞を独占する快挙となった。

学生記者 滝沢孝祐(総合政策学部3年)

「花丸」最優秀賞の瞬間

このコンテストは、北は東北大学、南は九州大学まで24大学62ゼミが参加する、日本でも有数の規模を誇るインゼミ(インターカレッジゼミナール)。創設したのは元慶応大学総合政策学部教授の竹中平蔵ゼミらの有志たちだった。最優秀賞は毎年出るわけではなく、現に昨年は出なかった。コンテストの運営も学生によって担われている。

「発表された瞬間、ひとり座席に座っていた同じ論文グループの薄井寛くんが目が輝いていたんですよ」と、鳥居長英さんがうれしげに語る。「私と鳥居くんは表彰式の準備で、裏方に回っていましたから」と竹中恵実さん。

最優秀賞だと思っていた、横山ゼミの違うグループがまず優秀プレゼン賞・優秀賞に決まった。もう1つのグループも優良賞に。舞台袖で二人が交わした言葉は、「どうやら私たちのグループが最優秀賞かもよ!?!」。

座席をみると、薄井くんが、こちらを見てキョロキョロと落ち着き

ない。そして鳥居さんが審査票に目をやると、「花丸がついていたんです……横山ゼミ産業競争政策A班に。最優秀を受賞したんです」。3人は、目と目で喜びあったという。

容リ法の事態を分析

毎日新聞(05年4月18日付)にこんな記事が出ていた。

《食品スーパー大手のライフコーポレーションは18日、容器包装リサイクル法に基づいて支払いが義務づけられているリサイクルの委託料を「今年度分は払わない」と表明した。委託料が過去5年間で3倍以上に増加したため》

鳥居・竹中・薄井チーム(産業競争政策A班)が発表した「企業による経済性と社会性の両立」は、こうした現場の実態にも切り込んでいる。問題意識、現状把握、現状分析、政策的インプリケーション(政策提言)という4部構成からなり、70ページにもわたる。

「私たちの論文を15分でプレゼンするのは無理なので、類似研究でないう現状分析の発表に力を注ぐことにした」そうだ。

容器包装リサイクル法の施行に伴い、スーパーマーケットなどの特定事業者には、食品トレイなどのリサイクル義務が課されるようになった。しかし現状では、処理委託料を支払わない事業者(フリーライダー)が存在し、委託料を支払う事業者との間に不公平感が存在している現状がある。さらに、それに追い討ちをかけるかのように、事業者が排出量の削減努力を行っているにもかかわらず、年々リサイクル委託料が高くなっているというパラドクスな構造が存在している。これでは、リサイクルの経済的インセンティブが働くはずがない。先の記事にあるように、食品スーパー大手のライフコーポレーションが委託料の支払いを拒否したのもこうした背景がある。論文ではこうした現状を詳しく分析し、リサイクルに係る委託単価を計算し、社会的コストの不公平な負担を改めるいくつかの政策提言につなげている。

「あいつらには負けられない」

ちなみに竹中さんはゼミ渉外部。春ごろから月に2回程のJSFJ会

議をこなし、夏を過ぎる頃には週1回の会議に参加し、当日の準備を進めた。また、コンテストという形式をとりつつも、途中で幾つかの勉強会があるが特徴的だ。論文の書き方という基礎的な勉強会から、問題意識についてのプレスト方法、政策提言の方法。そして中間発表を経て、プレゼンについての勉強会と、学生たちはコンテストに参加することで互いの水準をアップするプログラムとなっている。

横山ゼミでは3年生4グループが切磋琢磨しながらコンテストや発表に臨んだ。「あいつらには負けられない」。仲間での競争意識もプラスに働いたようだ。

同ゼミでは、3年次にはグループでゼミ論文を、興味のあるテーマに分かれて書き上げる。そして、今回出場した政策学生会議のようなインターカレッジ・ゼミナールへの論文提出を目標に取り組んでいる。OB・OGやゼミの仲間の協力も大きい。OB・OGや院生のなかには研究者を目指す先輩もいて、「ここは知らない、この部分をもって詳しく分析する必要がある」と、徹底的に赤

字を入れてもらったそうだ。

徹底議論の成果

でもなぜ、「容り法」というニッチな分野に目をつけたのだろうか。

「もともと私たちの班は、CSR（企業の社会的責任）について興味のあるメンバーが集まっていたんです。最初は容器包装リサイクル法など、誰からも出てこなかった。きつ



「ワクワクの最優秀賞」を語る竹中恵美さん（左）と鳥居長英さん

かけは、環境に興味のあった竹中さんが『日経エコロジー』を読んでいる、そのなかに「容り法」についての問題点が書かれている記事を見つけたことなんです。CSRについての政策提言を当初は考えていたのですが、あまりにも概念が多様であり難しい。そんなときに救世主として現れたのが、この容り法に関する問題なんです」（鳥居さん）

論文の執筆作業に取り掛かったのは5月。まず、メンバーで問題意識や価値観を共有する作業から始めた。しかし、企業に対するイメージがグループの中で大きく2つに分かれていることが、話をするなかでわかったという。

「鳥居くんは企業に対してプラスイメージ。あとのメンバーは、どちらかというイメージを抱いているんです。そのため、価値観の共有に時間が

かかりましたね」と竹中さんは打ち明けて、こう話した。「生まれてから、今までどんな人生を送ってきたか、1日1人というように、徹底的にさらけだしたんです。でも、この作業を経たからこそ、グループ共通の意識として企業に対する、必要以上なマイナスイメージを取り去ることができ、結果的に最優秀賞を受賞できたのだと思うんです」

大会要綱の一節には、「『日本をよりよくしたい、変えたい』みなさんは本気で考えたことがありますか？」と書かれている。

竹中さん「食や農業に興味があるんですよ。虫やカエルなど生き物が好きなんです。みんなが幸せに生きられる社会を実現したい。文系なので専門的に勉強できなかった不満もあります。この思いを活かして将来仕事をしたいと思っています」

鳥居さん「一人ひとりが本気で熱くなれる社会って良くないですか？ 頑張る人をみんなが応援できるような。人の志に関わるような仕事したいと思いますね」

大会のキャッチコピーにはこうあった。△革新は学生の手の中に▽。